

武蔵野日曜聖書講筈

霊の貧者

——マタイ伝第5章1〜3節——

1955年10月16日

小池辰雄

山に登って 霊の貧しい者 自我が一切を毒する イエス自らの告白 無能・無教・無言・無善 無即無限 キリストの言の中に身を投じ入れる 十字架の無言の言 霊生の息吹 既に天国が内在 モーセの十誡 モーセの背後にキリストの霊

【マタイ5】（私訳）

1ところが彼はこれらの群衆を見たので、山へ登ってゆき、坐られると、み許に弟子たちがやって来た。

2そこで彼は口を開いて、こういつて教えられた。

3さいわいだ、^{たましい}霊の貧しい人たちは。天国はその人たちのものだから。

●山に登って

いつ、どこで、どのように、といった問題は学問上も結論は出ていない。大体のことは、ガリラヤ伝道中、ルカ伝6章12節以下によれば、山に登って徹夜の祈禱をされた翌朝、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選んで、特に使徒と名づけた後に、彼らと山を降りて、「平かなる処」に立って、群衆の取り巻く中で、弟子たちを中心にして語られたように記されている。この「平かなる処」が果して平原であるか、山の中腹の平原的な場所であるかは不明である。ベンゲルはむしろこの後者のような場所を想像している。マタイ伝5章1節によれば、イエスは群衆を見たので、むしろ近傍の山に登って行って、おそらく更に小高い所に坐し給うた。すると弟子たちがその囲りに環坐したのであろう。すると間もなく群衆もその外側を幾重にも取り囲んだことであろう。とにかく群衆が多数いたと思われるから、そう高い丘陵でなかったろうし、相当の平たい場所もあったが、やはりイエスがあるいは立ちあるいは坐して語られた場所は、おそらく一段と高い場所であったろう。遠くには波静かなガリラヤ湖が眺められたのではなからうか。

特に「口を開いて」とマタイが記し、ルカが「眼を挙げて」と書いているのは、重大なことを告諭せんとするイエスの態勢を語るものである。マタイの「山上の垂訓」はルカの所謂「平野の説教」よりも内容的に整備している。おそらくルカのほうが概してその時の真の内容には近いかと思われるが、イエスがいろいろな場合に語られた垂訓的内実は、マ



タイ伝もこれを勿論完璧には伝え得なかったに相違ない。聖書そのものが種々の意味で破れた衣であつて、衣の中に包まれているイエスの霊言を真につかむこと、否、限りなく聖言につかまれることが我らの身読しんどくというものである。

● 霊の貧しい者

「心の貧しき者」

「このころの貧しい人たち」

口語訳の「このころ」はむしろ原語プニユーマの本来の意味の如く

「たましひ
「霊」

と訳すべきである。塚本訳ではむしろ「霊」と訳さないで「貧しい人」の在り方の面から「神に依りよすがら」と説明的に意識しておられる。

イエスは垂訓の開口一番、人間の最も中心であり、最高である「霊」の事態を端的に宣言せんとされたのであると思う。諸々の宗教は霊に関する事態である。そしてそれは千差万別である。しかも人間の問題にして霊の問題以上のものはない。霊は意思と認識と情感の根源の座であつて、人間の内的生命及び活動の担い手である（パウエル、ギリシヤ語ドイツ語新約辞典参照）。いわゆる、「精神」は霊の観念的な面であつて、「霊」は生命の根源である。「肉体」の死滅と共に滅びるものではない。

イエスは人間全体を見るときに、その人の霊の在り方を見られた。霊の在り方が即ちその人の実存を決定する。

イエスが「さいわい」（マカリオス blessed, selig 「恵福」）と宣せられた霊の在り方は、どのようなものであるか。それは「貧しい」という在り方であつた。

「霊が貧しい」

とは何か。「貧しい」（ブトーコス）とは乞食の如く貧しいことをいう。ドイツ語で betelarm（ベッテルアルム）という。ルターもここでそのように註解している。彼も学生時代はそのような貧乏学生であつたから、切実な解説である。レプタ二枚しか有もつていなかったのに、それを二枚とも賽銭箱に投げ入れた「貧しい寡婦」があつた。この寡婦の外も内もそのとき真に貧しくあつた（マルコ12・41～44、ルカ21・1～4）。

「霊が貧しい」とは、自分の霊をすっかり神の前に投げ出している事態をいう。この寡婦は「生命の糧」を買うべき自分の有てる一切をことごとく投げ入れた。これおのが生命を神の前に投げ出したこと、捧げつくしたことであり、これ、霊がまったく神におのれを投じきつている相である。だからイエスがこれを全的に喜ばれたのであつた。併しまたそのような惜しみなき魂は、驕りない本当の豊かさでもある。

「旧い神信仰と神の誠めを厳格に持っていた敬虔な人々は、殆どまったく社会の下層階級に属していた。そついつわけで、一方敬虔、義、畏神ということ、他方貧困、窮乏、



卑賤ということは殆ど同義同価値的であった」

とシュニーヴィントが解説しているのを見てもたましひの敬虔な人々は大方物質的に恵まれない人々であったわけである。イエスが

「富める者の神の国に入るよりは駱駝らくだの針あなの孔あなを通るかた、反やすつて易し」(マ
ルコ10・25)

と嘆ぜられた意味も、そのような現実からの烈しい言であったわけである。

●自我が一切を毒する

人間には精神的にも物質的にも自己拡充の根本衝動がある。ある意味で、これがなければ文化というものは進展しない。宗教においてこれが物質面にはたらくとき、それは御利益益的なものとなり、霊的にはたらくとき、最も忌まわしき、他宗排撃となり、果ては宗教戦争の如きを招来した。またサタン的角度がこれである。生命現象が拡充、展開の方向をとること、そのことは自然である。併しここに注意しなければならないのは、その衝動の奥に巢喰うところの「自我」というものである。これが一切を毒するのである。この「自我」が罪で、この罪はさまざまに変相してはたらく。人間の有もつ、有形無形のもの、それ自体どんなに善きもの、美しきもの、真なるものでも、それが「私」されるとき、たちまちそれはサタンの配下に属した事態となる。

イエスがあのように東西古今にまったく絶する御霊に満ちた人物であったにも拘らず、その霊の事態をつゆ私されなかつたこの一事！ これを見そこなつたら福音書のイエスを読みそこなう。また聖書はつかめない。まことに「曠野あらのの試誘こころみ」において、サタンとの一騎打ちをされたイエスの態度はこれを証して余りある。

●イエス自らの告白

「さいわいだたましひ霊たましひの貧しい人たちは、天国はその人たちのものだから」

とはどうしたら本当に身につについて、読めるのだろうか。私たちはこんなにダメな人間のくせに、とかく霊が自我を惜しんでいるのではないか。どうしたら本当に霊が貧しくなるのか。それともイエスは豊かな人であったので霊の貧しい人々をあわれんで言われたのか。断じてそうではない。イエスこそは霊の最も貧しい人であったのだ！

このイエスの言は、実に垂訓、嘉信である以前に、イエス自らの告白であったのだ。この垂訓の奥にイエスの告白を霊聴することなくしては、これを真に受け取ることとはできない。イエスは御自分が、霊がまったく乞食の如く無一物であつて、ただ神にのみ御自身をゆだね、神から一切を受けとりかつこれをいつも神のものとして自覚され、私されなかつた。無いの実存！ これである。



●無能・無教・無言・無善

「我自らは何事もなし能わず、……我を遣わし給いし者の御意を求むるに因る」

(ヨハネ5・30)

「わが教はわが教にあらず、我を遣わし給いし者の教なり、……己より語るものは己の栄光を求む、己を遣わしし者の栄光を求むる者は真なり、その中に

不義なし」(ヨハネ7・16、18)

「何ゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし」(マルコ10・18)

このようにイエス自らは無能、無教、無言であり、無善である。実にイエスは徹底的に「無」の人、無人であった。「貧しい」とはこの角度の事態を言う。こういう在り方を言う。そうしたら、彼御自身に神という天国が入って来た。イエスは即ち神という天国の身証体、天国体、福音体となった。だから、

「汝ら悔改めよ、天国は近づきたり」(マタイ4・17)

「時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ」(マルコ1・15)

と宣言されたのである。実に彼自らがガリラヤ湖畔に立たれて、「神の福音」を宣べつたえられたこの第一声に天国の臨在があつたのである。終末の世界がイエスの内に内在することなくして、どうして歴史的終末の到来を預言することができようか！

●無即無限

かくイエスはその霊、乞食の如く貧しく、一切を神より受け、神に依頼よりのたのんでなし、一切を神に帰し、神の中に生き動き在つた。それゆえにこそ、実は最も豊かであつた。無即無限とはイエスのこの実存態を言う。

「さいわいだ、霊の貧しい人たちは、天国はその人たちのものだから」

とは実にその言の奥に、

「私の霊は無一物、何ものでもない、まったく神のものだ。そしたら有難いことに、

天の父がまったく私を支配して下さい。私はそんな天国になつた」

という自身の体験の告白が秘められてあるのだ。「天の国」という原語の「国」(バシレイア)は「支配」を意味する語でもある。

●キリストの言の中に身を投げ入れる

さてこのように「山上の垂訓」の第一言の奥にイエスの告白を聴いた。もう私のたましひはやりきれなくなつた。もう道は唯一つしかない。聖書の註解でも説教でもない。どんな偉い註解書も役に立たない。何故叫んでくれないのか。何故祈ってくれないのかと、もどかしくなる。私は正直、説教を一回もしたおぼえはない。説教のできる人間ではない。



立派な註解も解説もできない。私にとって聖書はあるのつぴきならぬ書である。私はキリストに飢えているのだ。このキリストの言を本当につかみたい悲願で呻くのだ。私はもう仕方がないから、このキリストの言の中に身を投じ入れた。そうしたら、主イエスは私にこう言われた。

「幸だよ、おまえは。たましいが貧しくなったね。天国はおまえにやるよ」

と。ああ何をか望もう！ このイエスのみ言のほかに。私の投身したのは、キリストの聖言の中であつた。それもどうしてできたのか。それは「貧しさ」の極致なるキリストの実存！ その十字架の中への投身であつた。キリストと共に、キリストの愛の十字架に十字架され、私がすっかり罪から解放され、「私」からすっかり脱落している無私、無我を受けとつたとき、何とそれは楽な、軽い鴻毛こうもうより軽い、深山の靈氣よりすがすがしいたましいの誕生を見たことか。

●十字架の無言の言

「私が既にお前をこんなに貧しくしてやったのだよ」

と主は言つてくださる。その十字架の無言の言で、十字架という愛の靈の事実そのものより烈しい強い熱い言が天上天下いずこにあるか。行即言である。事実を以て迫る無言の言、事実という言が人間のたましいを動かす。

「十字架の言」

とパウロが言つたのはこの意味である。

私はキリストの十字架で、すっかり自分の靈が「無私」とされ、「貧しく」されているのを発見した！ 私はもう何も憂えない。靈的傲慢やパリサイ的信仰や御利益や觀念は、真にキリストにつく者の世界にはない。山上の垂訓（大告白）の第一訓はこれらの逸脱や転倒や安易やズレに対する最大の否！である。イエスの全福音は実にこの第一言で喝破されている。キリストの福音は何だと問われるなら、私はイエスのこの第一言を以て答えるに躊躇しない。

「霊が貧しい」とは、

「私たちの霊がすっかりキリストの十字架で碎かれている恩恵を受けとる」
 ことを言う。そして「碎け」そのものを「貧しさ」そのものを「無」そのものをわが本質となすことである。それは第一のアダム、旧き我の「死」の相である。

「天国はその人たちのものだから」

とは何か、キリストの生命、「永遠の生命」、あの復活によって実証された靈生が、当然この「碎け」「貧しさ」「無」「死」のあとから入ってくるではないか！ 与えられるではないか。恩恵のまた恩恵である。

無一物が無尽蔵であり、貧が即ち富であり、死が即ち生である。十字架のキリストが復



活のキリストに転ずる。このキリストの中に身を投ずる信においてこそ、み霊のキリストはわがうちに生きてくださる。これ神の意思の支配し給う「天国」である。

● 霊生の息吹

かくて我らは第一言に通うイエスの息吹を呼吸した。「呼」はイエスの十字架と共におのれを吐き出すことである。これ「貧しさ」である。「吸」とはキリストの復活と共にキリストの霊生を吸いこむことである。これ「天国」である。もともと霊(プニューマ)とは「呼吸する」(プネオー)という動詞が示す如く「氣息」であり天然の呼吸即ち「風」であり、神の呼吸即ち「霊」であることは実に深い連関を語るものである。かくて我らは、山上の告白の第一言をまつたくずれなく、キリストの中に投身して、内側から聴きかつ受けとった。み言が化体して来た！ 外から聞いていたのでは、所謂、教訓、誠めで、到底わが身に付かない。

福音書のイエスの言は、どれもこれも天的な霊生の息吹の言である。生まれつきの我らには不可能の烈しい熱い言で満ちている。しかもその何たる単純さよ、率直さよ、イエスは言に水を割り給わない。また聖書には形容詞もない。真正正味のなまの言であふれている。不可能なことをずけずけとイエスは言い放ち給う。そして

「なせ！ 行なえ！」

と迫り給う。誰か外側からこれを聞いて耐え得よう。

実は、イエスは

「内側から聴くのだよ。まず私に來なさい。私に体あたりしなさい。そしたら私から注がれる実力が、おまえに不可能を可能にさせてやるよ。神からの生命だからね。愛の力だからね」

と云っておられる。それで、イエスはルカ伝のように、端的に対称で語りかけてくる。

「幸だ、貧しい人たちよ。神の国はおまえたちのものだから！」(ルカ6・20)

と云って恩恵の現実の宣言となる。この場合、マタイ伝のごとく他称(第三人称)でイエスの言を聞いているのではなく、ルカ伝のごとく対称(第二人称)の呼びかけとして聞くのでなければ聖言は遠い。

● 既に天国が内在

キリストという「神の国」「天国」「永遠の生命」を恵与されて何を要しよう。かくて、私たちは生命と歓喜と力と愛にあふれてくるのではないか。「山上の告白」はいましめではない。実力の裏付け、恩恵の現実を以てする、現実告知であり喜ばしき勧告である。まさに福音である。これであればこそ神の国、正史の終末の到来の力強き預言である。終末的恩恵の現在と終末的希望の未来とが、



「幸なるかな……」

の第一言の中に、相共にのつぴきならぬ関係においてふくまれていたのである。「霊の貧しい」生き方の人には既に天国が内在し、且つまた必ず神の新天新地は待っている。

私たちのなまの現実が、どのようににみじめでも、このキリストのくださった十字架による「貧しき」が我らの現実の土台である限り、キリストに在つての平安と、喜びと実力が臨んでくるではないか。この恩恵の現実を如何せん。躓いても、倒れても、滑つても、転んでも、前進できるのである。山上の告白！ 有難きかな、告白第一言即ち全福音！ 歓喜の福音である。

●モーセの十誡

翻つて思う、モーセの十誡を、その第一誡を。

「汝わが面の前に我の外何物をも神とすべからず」(出エジプト20・3)

これは、原意に即して訳すならば、

「汝にとつてわが面の前では他の神々はない」

という断言命法的な現実告知である。「べからず」という禁止命令の意は是から派生してくるわけであつて、本来は断言的否定である。それ故に現行訳は誤訳ではないにしても、原意の重大な角度を逸している。その点で大ルターも惜しい訳し方をしてしまった。

Du sollst keine anderen Götter neben mir haben.

(汝わが面の前に我の外何物をも神とすべからず)

であるよりも根源的には、

Es sind dir keine anderen Götter vor meinem Angesicht.

(汝にとつてわが面の前では他の神々はない)

である。即ちモーセの十誡の第一言も、神ヤハウエーがイスラエルにとつて実存的な人格的關係に立つ神であつて、神がイスラエルに向かつて一対一の全的な人格關係を宣言しておられるのである。

「私はおまえの神だから、おまえにとつては他の神々はあれども無きにひとしいね」

という現実告知である。深い信愛關係である。もともとエジプトから救い出した救済の神の、実力の裏付けによる十言である。であるから、律法の真の精神は、神から民への信愛を以て貫かれ、実力の裏付けがあることを洞察することによつて、初めて掴めるものである。それ故に例えば、

「汝殺すなかれ」(出エジプト20・13)

も、

「汝は殺人はしない」

である。



「私が汝の神ではないか、どうして汝が殺人などしようか」という神意である。十誡は実に驚くべき福音的断言であった！しかるに、これを所謂律法化してしまったイスラエル民族精神の悲劇よ。しかし律法の奥に実は福音的精神が、否、福音の霊が隠れていた。それが預言者たちによつて閃光を放ち、イエスにおいて完全に爆發した！何たる秘義ぞ。

●モーセの背後にキリストの霊

モーセの十言と、イエスの山上の告白は実は相照応している。

「始めに言あり」

とはこのことだ。モーセの背後にキリストという霊にして言なる実在を洞察する者は幸いである。旧約と新約を貫いて身読、霊読せしめるものはキリストの霊である。モーセの十誡を完全に内側から読み、且つこれを実践し、満たしたのが、「律法の終末」(ロマ10・4)となつたキリスト・イエスである。イエスのみが神の意思を完全に体受、体現し、喜悅と信愛を以て、神言を身証し給うたのである。神の実力の故に、信愛のゆえに、

「モーセの十誡をも、イエスの山上の告白をも、歡喜と勝利の福音として、投身また投身して身読する者は幸いである」

かくて第一誡(モーセ)と第一訓(イエス)とは、神への信愛、キリストへの投身により、今昔相照して同音同質に我らにひびき来たる。榮光、実存の主キリストの聖名にあれ！

